

「死者の復活」

2016年07月21日

使徒言行録 17章 30節～34節。さて、神はこのような無知な時代を、大目に見ていただきましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。」死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。それで、パウロはその場を立ち去った。しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた。

パウロはアレオパゴスでアテネの哲学者たちを前にして説教をした。世界と万物を創造した神が人に命を与え、全てを支配しておられる。神は人間の手で造った神殿には住まわれない、金や銀や石で造った物は神ではない、偶像には何の意味も力もないと、パウロはユダヤ教の神観に基づき、生ける全能の神を語った。目の前には巨大なパルテノン神殿が建っており、技術を尽くした神々の像が祭られていた。これらを死せる偶像として、徹底的に否定するパウロの迫力に圧倒される。しかし、人間と自然の存在の中から、神を求めさえすれば見出すことができるという主張は、主イエスの十字架と復活に神を見るパウロの福音理解とは違うようだ。哲学者たちに受け入れられるように語ったからであろうか。

ここから、パウロの説教の本題に入っていく。「神はこのような無知な時代を、大目に見ていただきましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです」。分かり難い表現であるが、言わんとすることは、下記のようなことである。今までは神を正しく認識できなかったが、今は、神が選び遣わした方によって、正しい裁きがなされ、この方を信じるように命じられている。神は、この方を死者の中から復活させて、全ての人に神が啓示されていることを確証させた。名前は出していないが、パウロは十字架の死から復活した主イエスこそがキリスト（救い主）であり、この主イエスを信じるころに人間の救いがあると語ろうとしていると思われる。

哲学者たちは、死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言って、立ち去った。彼らは地上の肉なる体を蔑み、否定する哲学に立っていた。死んだ者が元の体に復活することなど、我慢ならない愚かな教理であった。パウロの説教を論じる対象にもならないとけんもほろろに背を向けたのである。パウロは理性を誇るアテネの哲学者たちに福音を語る機会を得て、喜んだ。彼らが「知られざる神に」と刻んだ像の話で、気を引く巧みな導入で話し始めた。また、偶像を否定し、神の全能を言うためにギリシアの詩人の言葉を引用して説得しようとした。知恵を尽くし、言葉を尽くし、天地創造の神を明らかに示そうとした。そして、パウロの最も語りたかった主イエスの十字架の死から復活を話し出すと、聞くに堪えぬと拒絶された。勇んで話したパウロの説教は彼らには全く通じず、一蹴された訳である。パウロの説教を聞いて、信仰に入った者も、何人かいた。「その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた」と記している。しかし、アレオパゴスの説教でパウロは手痛い挫折を味わったのである。